



リ 4
2931
巻 2

貞觀 日卯 去年十二月廿
辛未 清和天皇

惟仁と申すは、水尾若と申すは、
又、陸奥の皇子、北の皇子、
右也。若祥と申すは、一家、三天、五立

天安二年、九の、一の、一の、一の、
主位十八年、二月、三日、四日、五日、
まゝ、八月、九日、一日、二日、三日、
膳を、四日、五日、六日、七日、八日、
まゝ、九日、一日、二日、三日、四日、
唐辰二年、二月、三日、四日、五日、
○閏十月、六日、七日、八日、九日、
冬、一日、二日、三日、四日、五日、
辛巳三年、六日、七日、八日、九日、
○宣明曆と申すは、一の、二の、
壬午四年、三月、四日、五日、六日、
癸未五年、七月、八日、九日、一日、
○は、二の、三の、四の、五の、
○は、六の、七の、八の、九の、

唐辰二年、二月、三日、四日、五日、
○閏十月、六日、七日、八日、九日、
冬、一日、二日、三日、四日、五日、
辛巳三年、六日、七日、八日、九日、
○宣明曆と申すは、一の、二の、
壬午四年、三月、四日、五日、六日、
癸未五年、七月、八日、九日、一日、
○は、二の、三の、四の、五の、
○は、六の、七の、八の、九の、

寺と云。弘法大師の法王子道暲と
云僧の軍養也。あつ日道昌最良の
衣の袖よこころざうがさう祝ひあつた
目とらち衣の袖を截てこれと圖一
なり。は福さよあんぢまごんのかま
を也云々

同年○儂尼あやひきまごまごまご
乙未十七○あぢらら此基經四十乃賀とまごま
○同くもつひのり仲平うまう

○六月四日雪あり

丙申十八○十月天皇位をす乃らま子天皇
まよゆづりまあ○十二月清和帝よ太上天皇
乃そまごまごま。ほまみ屋山よあまあま
み屋大のまごまごま

元慶 **聖陽成天皇** 正月三日伊そくあ
丁酉 涉年八とい貞徳親
王とまごま。伊母ハ二条乃后身り生寺清和
才一のまごま在位八年

基經 栲嶺南白
大ぬ六后

○正月廿日紀乃 五雲を奉り

○二月廿日のぬの使まごまのりあうり後
○六月大ひりのせ八福あまのりまごま

○傍心遍照ひまの元まごまごま

戊戌二年○四月八日たうの再編まごま
○九月まごまごま大ぢん

己亥三年○五月八日清和太上天皇位を
まごま○遍照傍心は使と○旅良まごま
○まごま傍心は使と○まごま

庚子四年○三月清和太上天皇崩つた
際よまごまして丹後乃水屋まごま入る
○五月八日あうりのまごまのりまごま

五十六○十二月清和太上天皇崩つた
一といあまの山よ葬まごまは月とまごま
まごままごま○かま乃毒院むまごま
乃宮ま入る

辛丑五年

壬寅六年○二月まごまの唯三宮ま使と
癸卯七年○二月勸海國の使まごま四月ま

入系菅原相のりて賜名乃宿名
○二月十七日日輪乃右子御名

○十一月天倉程氣かくりてくさぬの氣
送とかりて中基程とてくさぬの氣
は加部一後とて ○世宗

甲辰八年○二月四日天倉と二系陽御院
は孝かきより太上天倉を乃孝年とて
阿ははと十七とて ○同廿三日時康親と

とむくまきりはくくわめつりむ
○紀勢をいさる ○とてくさぬの國とて
乃樹をつくりて名とて十六丈

仁和 仁明帝才三の宮
乙巳 子時康親とて
乃樹をつくりて名とて十六丈

仁和 仁明帝才三の宮
乙巳 子時康親とて

はよ小松乃孝とて孝なり基程乃孝
乃孝元慶八年に五十六とて一とて位
つとて元位三年

○七月より地とて雷電はあつてくさぬ
がくく。又ははとてくさぬの國とて

○八月天倉程氣かくりてくさぬの氣
○教仁親とて孝とて醍醐帝とて也

○十一月信通昭とて七十乃負とて也
丙午二年 ○正月より乃嫡男時平御裏

乃孝とてくさぬの國とて
乃孝とてくさぬの國とて

丁未三年 ○七月晦日地とて河あふれて
屋敷とて ○八月内裏乃地は河乃東の松

系とてくさぬの國とて
系とてくさぬの國とて

仁和 先孝天皇才三
戊申 乃孝とてくさぬの國とて

○同廿六日先孝天皇崩とて孝五十六
乃孝とてくさぬの國とて

○八月仁和寺とてくさぬの國とて
乃孝とてくさぬの國とて

○九月信通巨勢乃金とてくさぬの國とて

乃みまきの庇乃際ふ淡の世の儒者
を盡くしし〇十月右大臣源朝臣薨す

巳酉(寛平)元年〇正月朔日帝四方を經し

まの四方殊乃るぞ免也

〇五月よる(後)水八まんごうをりうごく

〇六七月をぐるるころかいた天下大に飢り

〇十一月もめて賀茂(後)河内(後)のまうりま

〇十一月基經は腰輿(後)に輦とゆるるる

庚戌二年〇正月十八日七條のつゆとごころ

より例とるる〇信(後)通(後)昭(後)藤(後)

辛亥三年〇正月十三日(後)太政大臣(後)若(後)名(後)

基經薨す〇五十六正一位とかくく(後)基(後)越(後)

前(後)を封(後)し服(後)宣(後)公(後)と(後)儀(後)と

〇十月廿九日(後)園(後)院(後)と三井寺(後)の(後)開(後)山(後)給(後)

徳大所(後)乃(後)ま(後)り

壬子四年〇五月多系(後)時(後)平(後)檢(後)非(後)遠(後)使(後)位(後)

〇菅(後)原(後)相(後)類(後)聚(後)國(後)史(後)と(後)儀(後)と

〇(後)敏(後)行(後)海(後)國(後)へ(後)ゆ(後)く(後)勅(後)書(後)と(後)り(後)く

癸丑五年〇(後)藤(後)原(後)相(後)頼(後)朝(後)の(後)薨(後)す

〇(後)藤(後)原(後)朝(後)臣(後)の(後)薨(後)す

〇(後)藤(後)原(後)朝(後)臣(後)の(後)薨(後)す

甲寅六年〇四月よ(後)藤(後)原(後)朝(後)臣(後)の(後)薨(後)す

乙卯七年〇八月左大臣源朝臣薨す〇年七十三

はとるる六条うらうの院とつくり(後)藤(後)原(後)朝(後)臣(後)

大なる池をやり毎日あまがささるる(後)藤(後)原(後)朝(後)臣(後)

百人とくとあまがささるる(後)藤(後)原(後)朝(後)臣(後)

られく乃らあまがささるる(後)藤(後)原(後)朝(後)臣(後)

はるる大(後)臣(後)と(後)号(後)す

丙辰八年〇正月六日子乃日の宴(後)す

つん(後)後(後)よ(後)ら(後)る

丁巳九年〇菅原相(後)頼(後)朝(後)臣(後)の(後)薨(後)す

と(後)同(後)く(後)改(後)を(後)お(後)こ(後)る

太子よ(後)思(後)り(後)と(後)く(後)朱(後)雀(後)院(後)より(後)つ(後)り(後)る

三十同日太子(後)敦(後)仁(後)親(後)王(後)と(後)す

昌泰

第六 醍醐天皇

昌泰 第六 醍醐天皇 昌泰 第六 醍醐天皇

戊午

一乃皇子世は延喜元年三月廿五日

七月は清和そく由延喜十三年三月廿三日

○延喜時系九大臣 ○菅原相太大臣

○六月三日天皇はて人の面とあはれ

○十月宇多上皇は片燈はよきゆき又大和の

宮跡よきゆきとあはれ

○十一月朔日冬をむの賀を

己未二年 ○二月又日そめどく右大臣

○九月皇子内親王いせの齋宮よきゆき

○十月太上天皇は飾とあはれ

金剛院と修むこれに空と修む始也

○十月二かうか東大寺とてくえんちう

し。太上天皇の修むとくへし

しとめづりなむ修む一人修む

庚申三年 ○四月はひくうぐまめり

樹乃こどもあは金又の仏あはり

○七月はききあはり

○十月三君清行天文とく人かへ

とてつらへ

○同月延喜元年 ○正月元日あは

○同月五日あはり太宰の権帥

とてつらへ

私示わんをさう太大臣とて

とるにかり世の人用ひる

九大臣あはれとて

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

とてつらへ

これよりかゝる字多は皇のかりまは
ありきによりて清の乃強と云ふ事

壬戌二年○たいて寺のうらん刑家俊
は似ざらふ

癸亥三年○二月廿五日管西相つら乃配
ふとて薨トあり五十九のあらんもふ事

○空也上人生まふ

甲子四年○日本紀を傳せむ

乙丑五年○正月三日天皇仁和寺よみゆ
○四日時平が館に移す○四月十五日紀

勢く古今新考をえそそんであつ

○十一月延喜格とそそふ

丙寅六年○時平乃子頼忠生る

○八月天皇より史記とよこまふ

○九月時別とそそふは遠城あつる
注本十
六人とそそふ

丁卯七年○十月百紀列すもの、本宮より正
二位とそそぐ○同月には皇より御守にゆき

○天皇よりはよみ事

戊辰八年○時平ゆら乃のいさり社作ら

己巳九年○四月官位大臣を時平豊
とそそふ二十九正二位太政大臣とそそふ
本院大臣と号す

○ある記云時平大臣病とけく
とそそふよりいむそは天下に効験の

僧と云は清亮を和と後トありて加
指すしつらに大臣乃大臣の耳より

ちいさき事とそそふしつらとそそふしつらとそそふ
事ありむらむらとそそふの徳言よまふ

ふしつらとそそふとそそふしつらとそそふ
ころまんとそそふとそそふしつらとそそふ
ともそ効ありとそそふとそそふしつらとそそふ

ころあつとそそふ管西相の養化の神天
満大自在天神とそそふしつらとそそふしつらとそそふ
雨に扱乃ふとそそふしつらとそそふしつらとそそふ
やめ物結々を時平大臣とそそふしつらとそそふ

いひぬれ息女乃女侍に嫁乃春宮
もつとて薨せさせしぬ二男八色大侍
保忠も同おもて病とつけてさつとて
後裔を承る俗業降格とてむ内宮此屋
大將と打あげてふとをを我が首と
んとをなうはすなりてさつとて絶えまひ
たり二男敦忠中納言も現世と時平の
大長一人よりあつめを多しをて一男
つらひまひくる神罰の行らるるを
ふれ云

同年○七月六日など寺乃岡山聖寶寂と

○八月のくそり、たささ柚櫓冥なる

庚午十年○二月廿四日二条のふとを薨せ

○三月廿二日東寺より始て弘法大師の影
影供とむこなり

○信貴乃毘沙門天出現しふふ○大いなり

辛未十一○正月七日ころ菜とさつとていなり
○五月十日東大寺あふなり

壬申十二年○多田満仲まう

癸酉十三年○三月右大臣徳光薨せ六十九の

○八月大風おとぬ

甲戌十四年○五月二日めいんやうれとてふ

よりと。系部六百家ありてうまう

○六月大あゝ同廿八日始恩大師寂と

○七月あぢ系乃忠平 隆平の太長長子任と

乙亥十五○七月五日日梅ひかりと失つて月の比

○瘡瘡をさといとら○隆平永寶の孫と

丙子十六○五月七日清和才六乃中まお貞純親と
薨せらる桃園親と号と保氏乃先祖也

丁丑十七○大いなり洛中乃井の水くれと

○十二月一日東大寺かゝとん修治谷百廿四日焼

戊寅十八○十二月二日三輪の岡山相應和尚と

己卯十九○あぢ系乃仲平あぢらく寺と

○勅とらて弘法大師の文冊と経巻と納む

庚辰二十 辛巳廿一○十月さつとて平惟扶

をさつとて弘法大師号満る

○敦敏まゝのち小佐理と号す

壬午廿二〇けし大いなり

癸未延長元年〇寛明を今すうんまをこれ

朱雀院なり〇三月太子保明親王兼

文彦太子と後をせしむ

▲延長の年号改元のりけは聖徳太子の
極父兄身より大井公忠と申と人あむい
もなきて改元してころを経てしむがら
まひらうが大意つらむと奏言さしき
ま我とてしむけらうて。即裏下あれと
まねをみ息信明信者二人たかのみとた
まけとまのりま事のれ何ぞとほ為
るをれをいぬらうとてうらめて臣真官
乃極とてもまらうとまらまのりらうが
始一まらうりなる人乃の夜冠やまが金
輪のりまをさしてて粟若酒のわら
延長元年四月四日雨争りし
死すのりまらまらまらまら



延長九年四月四日雨争りし
死すのりまらまらまらまら

天保三年正月五日平の門
むね田原をにらうせしむ



まゝにや麻のほれよあつらん所真らと
くへれとさるべしとアあを三十余人を
居らつる真官太まのりく時刻とつと
どをせりあるべしと同しつひと
度中身二の真官。り年号をわつたり
え。るを附とるあつるいふしつと
とのさすひよ。度中。各あつるさる
ころ神よんえて。そは公免。薩生はいと
ぞ奏せられくる。帝。たまはらるるさる
て。つて。延。延。乃。年。号。と。延。延。改。め。て
菅原相流。職。の。室。方。と。つ。こと。して。官
位。と。え。乃。大。長。と。改。め。一。位。の。一。階。を
と。つ。つ。さ。る。下。界。太平記見

甲申二年○大和の戦より八尾のころまで
かあーこあひさるるなりあり

乙酉三年○天を掩蔽しよるさるる

丙戌四年○村上天下を手にし成明親王とす

丁亥五年○上月忠平延式五十巻と確ふ

○十二月國珍くわにきは智徳大師乃号とある
戊子六年○六月小登る風このりかぜなりて此こゝを

賢けん乃徳とく行ぎやうとせしむるなりみまの
いさしの徳とくまうしむ○檀だん林りん寺じなり

○風かぜ土つち記きむらうゆき○性じやう空くう形けいなる
己丑七年○四月廿五日乃なり取と中ちゆう鬼形きけいなる

○八月はつがし田でんとまぐり人ひととかわりて
○九月くわがつの道風みちかぜ又また賢けん乃の徳とく行ぎやうなり

庚かうカ八年○六月廿六日むつきにじゅうろくにんかんとりて
よつとくひらちせいのうでんはあつてち
系けいの法ほふ堂だう平へいの希き世せいをかあまこの人ひと死しを

○九月くわがつ廿二日にじふににち天皇てんかうを病びやうよりてけらるるを
實じつ明めい親しん王わうよゆり同どう廿九日にじゅうくにち天皇てんかう崩くわ御ぎよ四
十六じゅうろくにんさいごの寺てら乃のもろよもろよのの事こと

秘ひ記き 空くう朱雀しゆくわく天皇てんかう 壬にん年ねん十一月じゅういちがつ廿一日にじふいちにち

辛しん卯ぼう 者しや十一じゅういち乃の皇かう親しん乃の實じつ明めいと云いは佐さ十六年じゅうろくにんねん
○六月むつき八日はつにち宮みやあり○同どう廿八日にじゅうはちにちと云いは

うらふ鬼形きけいの徳とくをさけし事ことなり

○七月しちがつ十九日じゅうくにち多た法ほふ皇かう崩くわ御ぎよ六十五

壬にん辰しん二年○齋さい承じやう明めいは王わうとありてよまら

癸みづ巳し三年○二月にがつ系けい中ちゆう乃の解げん空くうなる

甲かう午ぶん四年○名なのの後ごは系けい中ちゆう乃の解げん空くうなる

乙い未み五年○三月さんがつ廿六日にじゅうろくにち乃の事ことなり

丙へい申しん六年

丁てい酉ゆう七年○四月しがつ十五日じゅうごにち乃の事ことなり

戊こ戌しゆ天てん慶けい元年○四月しがつ十五日じゅうごにち乃の事ことなり

己こ亥がい二年○人ひと民たみらるるの神かみと云いは

○八月はつがし廿二日にじふににち乃の事ことなり
○十一月じゅういちがつ平へいの乃の事ことなり
庚かう子し三年○二月にがつ壬にん曾そう將しやう乃の事ことなり

〇冬紀つづきの夢

丁未 **六十二** 村上天皇 去年四月廿八日

身十四乃皇子成明親王と号して在位元年

〇母とくかたがのマールは八海と修せらる

〇九月九日の午うさうさうとささるは御後

元保丁丑もぐ七百余年みたり

戊申二〇八月廿四日日月さくびてあつらる

己酉三〇九月廿九日陽成上皇崩を八十一

庚戌四〇正月廿四日冷泉院まます 七月本宮

辛亥五〇佛はあつらふりけ年と千九百年

〇は撰わつ焦と撰〇空也上人六位経密

刹をつらる け寺ハ洛陽東山清水寺乃西ニあり

かき大悲なるんん脚士ハぢぢぢぢぢ

ナリとらるは平相國とよりり入道の條也

又別名空也上人の修教をあらせり

壬子六〇八月十五日朱雀上皇崩はあつらる

癸丑七

甲卯八

丁卯九〇三月十二日天徳はとくせんはゆき

うんのもつ物は一むと千本乃松はと

しとらるるは果とくは徳をあらせ

丙辰十〇清和天皇の御宇の路乃とらる

をあらせらるるはあらせらるる

丁巳 **天徳** 元年

戊午二〇十月廿四日六孫王御基薨

〇乾元大寶乃寶を撰

己未三〇三月はあつらると後宮ととらる

惟善使と心をあらせ

庚申四〇九月廿四日あつらるるは

安城よりつらるるはよりこのく帝王十三

代をあらせと母と空也よりしり

つらるるは乃の寶物はとととととと

失りしは徳を撰るは徳を撰るは徳を撰る

とととととととととととととととと

内侍神よりまを撰るは徳を撰るは徳を撰る

アとととととととととととととととと

辛酉 **應和** 元年〇十一月廿四日天皇は

御宇にあらせらるるは

御宇にあらせらるるは

戊寅(天元)元年

巳卯二〇三月乙酉(武)の行幸〇四月平野(平野)幸

庚辰三〇六月一日一条院(一条院)ままもと懐仁(懐仁)親王と申

〇七月九日(御)と風(風)雨(雨)もつ門(門)を(を)と

〇十月十日(か)じみゆ(じみゆ)〇十月廿日(内)裏(裏)上

辛巳四〇七月(乙)未(未)大(大)傍(傍)面(面)は(は)假(假)と

壬午五〇多(多)い(い)さん(さん)の(の)意(意)念(念)覺(覺)然(然)乃(乃)本(本)門(門)流(流)れ

そ(そ)以(以)て(て)強(強)勅(勅)ち(ち)せ(せ)う(う)の(の)門(門)人(人)山(山)を(を)お(お)く(く)各

別院(別院)は(は)居(居)と(と)〇九月(多)い(い)さん(さん)の(の)會(會)堂(堂)幸(幸)

あ(あ)ら(ら)び(び)く(く)〇十月十七日(い)り(り)ん(ん)り(り)

癸未(永觀)〇(う)つ(つ)あ(あ)ら(ら)せ(せ)と(と)あ(あ)ら(ら)せ(せ)と(と)あ(あ)ら(ら)せ(せ)と(と)

甲申二〇八月(帝)は(は)く(く)く(く)と(と)降(降)衣(衣)親(親)王(王)は(は)い(い)づ(づ)り(り)で

太上天(太上天)皇(皇)乃(乃)号(号)を(を)い(い)け(け)ま(ま)

乙酉(寛和)〇正月(三)百(百)良(良)源(源)寂(寂)と

丙戌二〇六月(廿)五日(天)皇(皇)花(花)山(山)寺(寺)に(に)入(入)信(信)を(を)落(落)す

〇七月(花)山(山)法(法)師(師)を(を)り(り)海(海)入(入)美(美)山(山)は(は)け(け)を(を)す

丁亥(永延)〇六月(六)一(一)條(條)院(院)園(園)軌(軌)院(院)守(守)乃(乃)ま(ま)も(も)也

〇正月(多)い(い)さん(さん)乃(乃)て(て)う(う)ね(ね)ん(ん)宋(宋)乃(乃)り(り)假(假)初(初)して

仏(佛)像(像)一(一)さ(さ)い(い)經(經)を(を)り(り)あ(あ)ら(ら)す

〇十月(乙)未(未)乃(乃)十二月(初)も(も)より(り)幸(幸)

〇多(多)い(い)さん(さん)乃(乃)院(院)南(南)部(部)乃(乃)は(は)る(る)め(め)り(り)幸(幸)

戊子二〇性(性)色(色)上(上)人(人)と(と)し(し)や(や)の(の)園(園)を(を)建(建)立(立)

巳丑(永祚)元〇八月(三)日(日)福(福)三(三)方(方)に(に)あ(あ)ら(ら)れ(れ)お

信(信)乃(乃)命(命)て(て)一(一)つ(つ)と(と)ら(ら)〇同(同)十(十)二(二)日(日)大(大)師(師)乃(乃)

中(中)乃(乃)法(法)門(門)律(律)住(住)仏(佛)圖(圖)く(く)づ(づ)く(く)

庚子(正暦)元〇七月(二)日(日)急(急)家(家)慶(慶)と(と)申(申)家(家)を(を)す

〇中(中)乃(乃)て(て)法(法)興(興)院(院)と(と)号(号)を(を)し(し)て(て)法(法)家(家)院(院)を(を)始(始)め(め)

辛卯二〇二月(園)軌(軌)法(法)を(を)崩(崩)壊(壊)す(す)也(也)

壬辰三〇〇(乙)未(未)乃(乃)院(院)南(南)部(部)乃(乃)は(は)る(る)め(め)り(り)幸(幸)

癸巳四〇(隆)東(東)乃(乃)院(院)南(南)部(部)乃(乃)は(は)る(る)め(め)り(り)幸(幸)

〇五月(廿)日(日)大(大)長(長)正(正)一(一)位(位)を(を)中(中)登(登)天(天)滿(滿)官(官)に(に)あ

ら(ら)る(る)〇(乙)未(未)乃(乃)院(院)南(南)部(部)乃(乃)は(は)る(る)め(め)り(り)幸(幸)

はくしのあしらくまもろくく一とまよ
ちくく一安事まよ下りて聖書をよと
上々の付湯くくせんよ

昨ハ北朝ハ遷をくうかたり。今ま
西都ハ取をまらひる戸くまう生ての
うらみ死くく軟びそ九組をなす何
今とくくくく聖皇の皇基と傳るべ

とより菅原まらりまの國安徳と云
甲午五〇瘦神乃まらり清兵衛とあらまら

山乃上まらり〇七月廿五日山火
乙未長徳〇二日あり秋より瘦病とら

〇秋の寛朝ひらくく密灌と修と
丙申二〇十月六日まらり社火

丁酉三〇八月廿七日多田備仲兼とく一八十八
〇あら系乃依理胡泰とゆらまら

戊戌四〇七月廿五日依理平と〇天下まら
〇十月十二日まらり

巳亥七保〇五月九日まらり三戸の

〇乃の登まらり花くくまらり
庚子二年〇にの院とら

〇張隆林とら けきハ洛陽七案の
みるまらり〇うわわりの或記云文徳天

皇乃改定まらり乃元毎まらり乃の
の勝軍地苑の像とらつて又一宝

堂まらりむらとまらりして世まらり
権現堂とらまらり乃のゆらハ慶徳中

納まらり聖徳とらまらり大長院まらり
地まらり死まらりつらまらりまらり

まらりまらりまらりまらり
〇乃のく慶徳院と林と けきまらり
今ハ傳上宗とらまらり

辛丑三〇五月九日瘦神をまらり
今まらりまらり〇十一月の裏まらり

壬寅四〇東大乃乃信齋然まらり清涼寺
のまらりまらりまらり

癸卯五〇十月新まらり乃の裏まらり
〇三十九

庚申四〇二月歳次大長道長法性寺より
丈六のあまご九のいを安通して三尊を
院と号すと

辛酉治安〇源頼光の遺徳

壬戌二〇七月乃長法性寺金堂より
よりなるを清堂開と号すと

〇佛師室利法持の叙と佛師叙位の始

癸亥三

甲子万壽元〇冬より秋まで疱瘡あり

丙寅三〇上東門院法飾して清浄を号すと

丁卯四〇四月より五月まで四尺余

〇十二月一日道長薨とく六十二

〇同月四日より五月の行成卒と五十六

戊辰長元平治堂下修羅とくむりん

己巳二〇夏より秋まで福来病と云

〇七月の西の風あり

〇十月國院太政大臣公孫夢と七十二

庚午三

辛未四〇二月の信忠寺の陳とくありて

首を多へむり〇十二月系後院とくあり

壬申五〇十二月八日法住寺に火あり

癸酉六

甲戌七〇八月大凡〇釋教園ありと云

〇後三条院まこと

乙亥八〇冬陽院に報告の令あり

丙子九〇四月十七日後三条院崩壊北のみ

丁丑元

長曆 **守元** 後朱雀院 去年七月に大なる
敦良親と云

後三条院乃同母才也在位九年

戊寅二〇冬三井寺の明徳信と天台宗あり

己卯三〇八月廿二日奉幣使と廿二社あり

庚辰長久〇九月十日より三月東山院あり

辛巳二〇正月一日大なる公任と云

〇三月大なる法隆寺の塔あり

〇勅して三井寺の戒壇とくあり

山守あり

延久 巳酉 壬午 後三條院

去年七月... 後朱雀院中... 延久

壬午也 在位四年 ○八月... 延久

庚戌二 ○五月... 延久

辛亥三 ○正月... 延久

○八月... 延久

壬子四 ○四月... 延久

官幣使... 延久

癸丑 壬午 白河院

去年十二月... 延久

在位十四年 ○五月... 延久

甲子 承保元 ○二月... 延久

○九月... 延久

○六月... 延久

乙卯二 ○係... 延久

丙辰三 丁巳 承曆元 ○... 延久

○二月... 延久

薨... 延久

戊午二 ○七月... 延久

己未三 ○十二月... 延久

庚申四 ○三月... 延久

者... 延久

辛酉 承保 ○三月... 延久

○六月... 延久

壬戌二 ○及... 延久

○十月... 延久

癸巳三 ○二月... 延久

○十月... 延久

甲子 應德元 ○二井... 延久

延久

延久

延久

延久

延久

延久

まきのきと祈へて勅符と書らる
あつらんうもと書らる奉快とていひて
先例を引信のまらるるがごとく奉らる
縁言やまびつていひて勅符ありし
る山門のりて空の傳説とてあつた社
のいふとていひてはれとてあつたる。初傳
止しつてかたへ二并も戒律の編者
とありていひて。初傳もといひて。我
くハ既教又大魔まをめていひての佛
はをりていひて。百口のあつて
誓をもとていひて。す。炉煙の煙
あつていひて。三十七日がらふ。上つて
あつていひて。怒りていひて。牙あつ
とぬていひて。山のり。佛像の
あつていひて。もといひて。初
初傳と一社の神あつていひて。怒念と
つていひて。初傳の先念とていひて。

乙丑二年○五月天を。地を。言を。信を。とらる

めまれとていひて。けいせいのあつて
官賢子のいひて。いひて。いひて
つていひて。いひて。いひて
丙子三○天を。自のり。いひて。いひて。いひて
あつていひて。いひて。いひて

丁卯 壬三 堀河院 去年十二月は。いひて
いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

あつていひて。いひて。いひて。いひて。いひて
いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

戊辰二○二月の上。いひて。いひて。いひて
いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

いひて。いひて。いひて。いひて。いひて
いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

巳巳三○五月の上。いひて。いひて。いひて
いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

庚午四○正月の上。いひて。いひて。いひて
いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

辛未五○二月の上。いひて。いひて。いひて
いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

○いひて。いひて。いひて。いひて。いひて

おとつらう は寺のま

巳酉○七月七日のほ皇崩御七十七

○侍破門院の法親より西山の法金剛

院を再興せしむるに南より始り

又立ると云文徳天皇御宇天安寺の改

て天安の寺と号せしむるに後醍醐天皇

再興せしむるに法金剛院と号せしむるに法隆

なり。律定より東山金剛院の再興と云

同年○りらうは新安朱煮り

辛亥天承元

壬子長承元○三月も御上より法親より

法親より法隆寺と云ふも或記に云は法隆寺へ

遷せしむるに法隆寺と云ふも或記に云は法隆寺へ

多麻上より法隆寺と云ふも或記に云は法隆寺へ

十一面観音の像二十一所をあらんぢ

と云ふ他言ハ天承三年三月十二日

に法隆寺の忠守僧侶と云ふ

○十月七日の法親より法隆寺

はまらへ仁和寺の法親より法隆寺

癸丑二○四月七日法親より法隆寺

甲子三○大徳寺より法隆寺

乙卯保延元○十月五日法親より法隆寺

丙辰二

丁巳三

戊午四○九月上より法隆寺

より法隆寺の法親より法隆寺

己未五○五月法親より法隆寺

法親より法隆寺の法親より法隆寺

法親より法隆寺の法親より法隆寺

庚申六○四月八日より法隆寺

○五月九日より法隆寺

○七月より法隆寺

辛酉法隆元○三月も御上より法隆寺

てきねはむととすも○十月はむのひち
らいつと崇徳院を廢しと社にんま
を伝まつけし時よはく一二のなは
を一院とすしとゆとくめんを新院とす
去年十月はそこの
聖徳太子八のむすむを位

十四年につく崩御

癸亥二〇六月二名院まの守仁親ま

○十月十一日根来乃岡山を上人寂

元祿十丁丑年まで五百余年ニ

甲子天養元〇元輔河内集とそ

乙丑又安元〇七月とそあつてつこよ
年早改えと〇八月崇徳院乃法母待

賢門改葬と

丙子三 丁卯三〇四月白山といざん乃

戊辰四〇四月八日おろすほ朝乃三

〇六月日裏多ん

〇七月は社寺とつてけさ大改を

忠通の草創也といふは高福の門
下り川の練禱乃より今もつふその
アささるりあつととくも御まを
かまの乃福徳を東やく寺能なる肉
も中五大堂を又法性寺法堂の一
同聚巷けとまり今もつて毎年二月
五日より同光日までけ堂の
寺の字の礼をあたふありく八町の
るの人家此門戸はけ礼をもちけ礼を貼
るるの疾疫をそらひの
るか守りそを解せと一
カニ後つ生土佛神乃威力を
との復とるれ也とけ況是
のまや簡の板の門あ
或と浄堂岡白道長云乃記云
七月廿七日法性寺五大堂と
己巳五〇十一月と乃大塔雷

庚午六〇八月五日春日乃神本洛入

辛未仁平元 壬申二 癸酉三〇正月十五日

平君登死云〇四月毎夜ぬえと云

内裏のうへと云ふことなる。おぬえを討

つた。よろしく清和らうびはま女あや

ゆかたよりまらふは流り。

甲戌又壽元

乙亥二〇まらふのうらつと云ふ

〇七月九日を(後院崩)終焉十七日

保元

〔十七〕後白河院

去年十月迄そくの

丙子

立位三年 〇七月二日多岐院崩を至

〇崇徳の院はじりん。是と保元乃乱と云

新院をさぬらふゆらうつと云ふ。新院は女

にあつて死にちんせい八れるお八信の

大徳のまらふらう。まらふをいふらう

丁丑二〇後成千載集と云ふ

〇六月大内裏をらう

平治

〔夫〕二條院

去(十)二月迄そくの

巳卯

白皇子立位七年 〇あらしの信和太師乃

のそらうまらにより上りまらうびニ信西

とらうらん。源朝とらうひてむらん。

是と平治乃乱と云信西を言へむらゆ

とれりけくびとらう。清盛兵と云

一信和と謀と云朝八軍と云れと云

よららゆ

庚辰(永)暦元〇正月三日義朝のりう

と云ふらう。家へ長田を言ふらう。

お田がむい後院の同くころの

朝乃ちやくかん悪候と云ひつら公家

らうけけとれころまら後院を云

とらうらう。このまらまらと云

三男よりまららりりらうて

しけとれ上院を云へら。地をのや

むらふらうて伊豆のくふらう

辛巳（應保）元○よりとて妻とらば成と云

をがくくびきき人きりしゆ（信濃）妻
けくくくわひととれまうりて（出づ）
新ぬり子されとも（新）まじす

○九月三日とる倉院まうと

○まよりの中納言（任）

○今どまの影目（吉）の（東山）

壬午二○一登り四人の子とらむ女と

○あぢありの（任）

癸未（長寛）元

甲申二○二月上皇の法教（よ）く（蓮花）王院

をくくくく今世と云大仏の三十二（堂）

千ととんと一十種と安座（一）と（法）二手

十月廿七日（僧）の（修）の（守）の（師）の（病）の（除）

脱心安座ととらわれ（う）と（ま）と（ま）と（ま）

はんとり（は）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）

まうくま一（付）と（平）と（念）と（寺）と（と）と（云）と（近）と（世）と（り）

氏家（附）とたかむ者（好）の（月）の（山）

い（は）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）

ををををのりて（一）と（百）と（一）と（百）

のまを遊り矢と云（は）と（三）と（十）と（三）と（十）

新（量）は二（万）と（千）と（百）と（十）と（百）

六十（と）と（百）と（十）と（百）

同年○東大寺（と）と（う）と（お）と（く）と（ま）と（方）と（保）と（念）

○八月廿六日（真）と（性）と（院）と（ま）と（ま）と（ま）

は（天）と（皇）と（乃）と（宣）と（經）と（洛）と（東）と（建）と（仁）と（寺）と（の）と（り）と（ろ）

眞性院と云はゆ（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）

沙忌を修（し）と（い）と（院）と（の）と（ま）と（ま）と（ま）

う（ら）と（れ）と（た）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）

を（は）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）

け（の）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）

た（し）と（て）と（ら）と（る）と（世）と（の）と（人）と（は）と（真）と（性）と（院）と（の）と（号）と（と）と（号）

乙酉（永）元○二（万）と（千）と（百）と（十）と（百）と（十）と（百）

を（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）と（ま）

○は上人津去宗をひろめあふ
 乙未(安元)元○六月あつ乃まの金三千あふ
 宋乃有玉山とく○天下苑瘡
 丙申二○七月六條のめん崩と考十二ふ
 一頁(治承)元○四月廿八日大内裏あつこれら奮
 製よくく○五月山門の屋をゆきと修
 皇まふく○六月は雲のくひくして
 庫積(治承)元をまの鬼塚が陥へるごと
 戊戌二○五月まが東まふりつ○三月ん
 くらじとく○十一月安徳天皇をまを
 ○鬼塚が陥乃流人きりつねをよりゆきれ
 くゆ後と○三の屋の文をゆきへるごと
 ○八月一日小松三作らつ乃ま豊武と早ま
 ○しやうぶんづらかりうらく○十月大がん
 ○十月は雲は皇を多羽乃離宮まあ
 公はまあ四十三人の官辭とくつ
 庚子四○二月天皇位を東宮まゆづりて新院と
 柿(治承)元○二月の院のまのくはのま



えんかんののけぬとよ化を
 こことあすけつうはんといす

壬午二年七月三日より上洛
 して山より入ると本年家を
 かたきとたかむら福多引く



○四月がく源三げんざん保よりまさははる中二なかつたにまよまよ
 命いのちをたもたぬまかりてひめんとくろくろのり
 あつたれとく学まなぶ佐平さへい信のぶ院いんより平家へいけの付
 手てとたかむらまけとよりまさははる中二なかつたにまよまよ
 七十八しちじゅうはちの命いのちをたもたぬまかりてひめんとくろくろのり
 くれたよあつたれとくまよまよ

○六月むつきまよりのりよりひとくまよまよ都みやこと揚あき那な
 宿しゆくをたもたぬまかりてひめんとくろくろのり
 まよまよとあつたれとくまよまよのりよりひとくまよまよ
 八はちまよまよのりよりひとくまよまよのりよりひとくまよまよ
 くりをたもたぬまかりてひめんとくろくろのり
 十じゅう二月にがつはる中二なかつたにまよまよ
 ○三月みづきはる中二なかつたにまよまよ
 ○四月よしかはる中二なかつたにまよまよ
 ○五月いづみづきはる中二なかつたにまよまよ
 ○六月むつきはる中二なかつたにまよまよ
 ○七月なつたけはる中二なかつたにまよまよ
 ○八月あごはる中二なかつたにまよまよ
 ○九月あきはる中二なかつたにまよまよ
 ○十月あきはる中二なかつたにまよまよ
 ○十一月ふゆはる中二なかつたにまよまよ
 ○十二月ふゆはる中二なかつたにまよまよ

辛丑 **安徳天皇**
 母中平姫を
 建礼門院と号す

○中平姫を建礼門院と号す

○正月十四日、上皇崩じ、秀光一とす

○閏二月四日、平相國情盛衰、六十四の次

駁字、益家督とけぐ、○五月廿五日、安徳

壬寅、壽永元、○八月よりとも、備前、頼朝、源朝

母八平の母と云、小糸、伊波、むとあせ

○よりとも、江流、舟、財天とらん、ア、ア、ア

癸卯二、○四月、平家、本、さう、う、まうと、城中、けり

く、加賀、乃、ち、お、系、ま、て、く、ら、せ、ん、平家、の、ア

ま、れ、く、あ、ま、く、つ、け、時、春、あ、ま、ひ、り、源、元

○七月、う、ま、う、上、陸、い、く、え、い、ご、ん、の、が、り、て

系、終、と、え、あ、う、と、平家、と、ね、ま、い、と、く、い、ん

至、上、と、り、ま、り、て、整、と、あ、ら、て、海、軍、入、り、ん

法、皇、ひ、ひ、そ、う、あ、ま、い、ご、ん、う、ま、う、陣、ま、り、ま

○同、廿、八、日、義、仲、ま、い、の、あ、ま、い、ご、ん、な、る、戦、い

任、下、頼、朝、将、軍、の、ま、と、ゆ、う、と、う、く

○八月、た、ら、う、つ、あ、ん、ま、い、ご、ん、の、あ、ま、い、ご、ん、ま、う

く、く、あ、つ、ま、い、ご、ん、の、あ、ま、い、ご、ん、ま、う

○九月、平家、う、く、系、う、り、あ、ま、い、ご、ん、ま、う

○十一月、う、り、な、り、あ、ま、い、ご、ん、ま、う、て、あ、ま、い、ご、ん

あ、つ、法、皇、と、又、系、乃、法、皇、あ、つ、あ、ま、い、ご、ん

基、通、下、宮、十、九、人、の、官、制、と、う、り、天、皇、の

産、ま、り、あ、ま、い、ご、ん、と、井、さ、乃、七、更、後、系、ま、う、あ

百人、と、う、り、と

甲辰 去年七月、は、ま、く、の、**全二** 後鳥羽院 高倉院、弟、四、の、皇、子

美、和、二、年、安、徳、と、ら、な、る、源、朝、の、あ、ま、い、ご、ん、ま、う

よ、の、と、法、皇、の、い、ま、う、り、ひ、ま、く、位、あ、ま、い、ご

在、位、十、五、年、順、徳、院、の、弟、宇、承、久、三、は、ま、い

む、あ、い、ご、ん、と、あ、つ、ま、い、ご、ん、の、あ、ま、い、ご、ん、ま、う

○正月、本、宮、う、り、ま、り、頼、朝、と、宇、治、ま、い、ご、ん、ま

か、つ、あ、ん、頼、朝、あ、つ、つ、あ、ま、い、ご、ん、ま、う、あ、ま、い、ご

死、と、今、井、宮、う、り、系、平、も、ま、い、ご、ん、ま

○二月、重、盛、の、弟、一、乃、首、と、ら、な、る、源、朝、の、あ、ま

い、ご、ん、ま、う、平、家、の、い、ま、い、ご、ん、ま

て、み、ら、り、と、ら、な、る、あ、つ、り、付、死、ま、い、ご、ん、ま

辛酉建仁元○七月程家百日乃まりのりかき
○十二月新古今集と云ふ

壬戌二○六月望西建仁寺と建亨後宗ひら

○七月程家七の大将軍と伝

○十月十五日安永の寺乃 因尔の東之寺乃

癸亥三○八月程家やまひる 齋齋家智と云

○十月より家と伝る乃くわふまきと

乙丑二

丙子建永元○二月乃の女まふし

丁卯承元元○二月源を上人念佛宗をいり

まふしうらん乃り上り乃官女こ人

わらんせり乃後多相違録ましく

空上人とまぬきのあへり。あらん

上人をとこの函へたを。信蓮坊あふ

二人乃のあし子ハ。あふあふとて死罪せら

○四月。在宗乃開白若るあふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ。あふあふ。あふあふ

○後醍醐天皇の御事

癸酉(建保)元○正月一日くまろ大崩

○三月和州の乱に因りてさく滅亡

○八月清水寺と法興寺と幸修

甲戌二○四月えいんの信三井とて

乙亥三○正月山崎の故跡

○六月建仁寺の再建

○八月九日大風堂社人家を吹

丙子四○宋乃陳和政を初てさく

○十月さくも後唐乃のぞく

○大船をつくししびおかりて

ほのふ杉とて

丁丑五○六月松家乃公曉と

とく○九月四日くまろ大風

戊子六○さくも右府小任

己卯(承久)元○正月廿日

公曉乃さくも北八の頼朝

と三代將軍と云○六月左府乃家

とく○七月大あ

庚辰二○二月廿六日清水乃

○十二月くまろ大風

辛巳三○二月十六日蓮上

○五月後醍醐院乃

院とてさくも

院とてさくも

院とてさくも

院とてさくも

院とてさくも

壬午 貞應 今五 後堀河院

佐十一年○二月乃

三 癸 五月守貞親王崩

又持明院と

○くまろくまろ小三入乃

甲申(元仁)元○六月十三日

乙酉嘉祿元〇七月二位源氏政子薨也尼將

軍と云〇九月源氏鎮信を寂と

丙戌二〇正月より〇征夷大將軍を寂と

〇下野乃國芳賀乃那高田と云んを寂し

專修寺と号と親皇を人々を寂と

丁亥安貞元〇三月八日やんゆる俊初寂と

戊子二〇年中と云ん

己丑寛喜〇十月を傳津乃を寂し

庚寅二〇六月の常時氏病死〇同九月を寂し

由よを寂し〇七月十六日おふりそ大を寂し

〇十月十六日奥列を寂し

〇十月より〇十月十六日奥列を寂し

〇十月より〇十月十六日奥列を寂し

癸己 天福 〔天〕四條院 後堀河院乃太之を 佐下年

甲午文曆元〇八月は堀河院崩也多廿三日

〇天狗さう乃と云ん千るあまり乃戸

未來不乃三字と一書のあふり

乙未〔天〕〇四月を宋よ入之無準を寂し

法と云く 〇四月を宋よ入之無準を寂し

丙申二〇十月より〇のゆと

丁酉三〇四月を寂し

戊戌曆元〇四月より〇のゆと

己亥〔天〕元〇二月廿日。は多を寂し

崩也六十六〇五月東大寺大佛乃を寂し

庚子〔天〕元〇北条河を寂し

辛丑二〇八月廿日より〇を寂し

壬子三〇正月九日四を寂し

〇二月より〇二月十六日

○圓爾承天寺とてり

癸卯 〔十七〕後差我院 ちみごとく院事二
寛元 乃のまを左位四年

○六月ぼつちる寺院事

○九條相國道修る東福寺をこころし
國爾聖一國をかいとんとせ

いさり山乃山よまを日山と号して洛陽

修る五山乃弟四位くけ寺乃付修墨

殿後中々々。寺の又通天橋とのみ

指を指の仲乃楓葉はらとてり奇観

け通天橋のがくハ大明國所乃筆修る

又偃月橋乃びくハ龜山法皇の勅書也

寺産千八百石云々

甲辰二〇四月お守とよりつごまゆつ。狂經乃ま

狂編けつ六の

巳巳三〇正月客皇とぬらよあつらつ

〇二月もつごが鏡食はつらつら

○七月よりつご入るせむ

丙午四〇七月よりつご入るくぬつより氣海つ

○南溪多のど。ほよ大覚さんどと号も

うぬくくらんちも乃くく人也〇おらあめ

乃らあめいさとてり

丁未 〔十八〕後深州院 ぼろがのノ事二
乃のまの世を位

十三年。富小路院と号し又多修丹院を

号も〇六月くぬくく大をらつ

戊申二年〇十月二日大の三年をらつ

〇くぬくく

巳酉〔建長〕元〇二月開院乃らり谷民をるい始

〇三月をらつるをらつ〇月十六日じこ

ら乃らめをらつ〇月廿日をもすを川乃

ふあつらしてくれまい乃くくをらつる一屋を

〇急心修る事 庚戌二

辛亥三〇續は撰集とてり〇市開院乃ら

壬子四〇四月上乃一宮宗事あつらつて鏡

今より後とて征夷大將軍とておぼせられ
嗣系より久家○八月十八日山崎乃社の
山崎乃久はゆきてのえおぼせられたる
まゝの木の糸れこどもあまのけり

癸丑五○八月廿五日平治元年乃開山道元
寂とこれを曹洞宗のそとめり

○十月小糸時頼くまらうの建長とてん
まらうし宋乃は門蘭溪とていさんとて

甲子六○法苑宗初よりとてん
乙卯七○さうこく一を福乃堂とてひく

丙辰康元元○六月十日つり水谷人の住りて
○八月かのね家よりつりて薨也

○十月かのね家よりつりて薨也
○二月小糸時頼くまらうの建長とてん

丁巳正嘉元○二月十日大徳とてん
○同廿八日さふ乃地蔵とてんやう

戊午二○八月一日大凡○同日大徳水人の住りて
巳未正元元○春とていまきとてん人たがんとて

らゝるにそて人とてんあ月とてん
かこととてん

庚申 文應 龜山院 互佐十人
はまがの院六のま子
後林の院

辛酉弘長元○十月小糸時頼くまらうの建長とてん
壬戌二○十月廿八日本願寺乃開山親會聖人遷化

御と一満九十 元禄十年丁丑とて四百三十六年
癸亥三○八月十日大凡

○十月廿二日小糸時頼くまらうの建長とてん
甲子文永元○がら ○三月えいん地蔵とてん

○五月えいんより三井とてん
○最勝寺とてん

乙丑二○廿五日乃まらうの建長とてん
○後古今集と表とてん

丙子三○二月二日泥とてん
○宗の乃子惟康とてん

丁卯四○宋乃明知客とてん
ははの文應四乃号とてん

○後宇多院

戊辰五〇五月八日 ぬの日はせんかきつびびつ
○蒙古のしん 様快きころ 文をよみしるふ
しんをよみしるふ

巳巳六〇二月二日 ころの月さしびびつ

庚午七〇五月廿日 糸の糸をよみ

辛未八〇十月十日 言ふころの月さしびびつ

壬申九〇二月十七日 辰と九上り崩れ五十三の

癸酉十〇如備上人 千本念佛とよむ

け千本念佛の寺の男とけ横寺とよむ
あんは堂と秘せ 方丈乃をよみしるふ
さくしるふ げたのさくしるふ 十日の念
仏舎とよむ 寺を念仏舎とよむ
かきるあんは堂乃像ハ佛工定朝乃作云
甲戌十一〇七月廿日 宗の宗をよみ

乙亥
○十月廿日 糸の糸をよみ
後宇多院
十三日 大皇女の位

○一邨上人のしん 神勅とわらわらし
時宗とよむ 世をよみしるふ

丙子二〇五月蒙古の使きころ ぬの月さしびびつ

○十月廿日 さくしるふ

丁丑三〇七月廿六日 ころの月さしびびつ

戊子四〇蒙古の元 蜀乃南漢 叔と大光 神師の身とよむ

巳卯二〇佛光 寺とよむ 〇三ヶ大念仏 寺

唐辰三〇十月十七日 一ヶ 東福寺乃 岡山 園亦 寂

聖一國所乃 是とよむ

辛丑四〇蒙古の元 軍兵十万人 奔飛六ヶ 船

ころの日本とよむ 八月二日 神風 ちよて 豊後 古

乃 船みさしるふ ころの 軍兵三万人と 八角 船

ころの 丁とよむ 〇十二月十三日 南 輝さるころの こん

普門 寂と 大明 神と 偕をよむ

壬午五〇十月十三日 蓮 寂と

○糸の糸をよみしるふ ころの ころの 七 佛光 寺

癸未六〇山門と 三井と 天皇の 別 園と 寺

甲申七〇 四月廿日北条時宗入道果卒

乙酉八〇 三月二日藤原公成卒

丙戌九〇 八月廿日阿蘇山佛光寺入道寂

○宇治格乃南つる小幡代停止の事十三重

○五文の石塔の事

丁亥十

戊子 後醍醐天皇 伏見院 壬午位十二年

正應 三月三日松平一と乃おん生ま

己丑二〇 九月將軍とわやと改改てさる御居

と十月之明ちとさうせのめち御居はてぬ

くさ下御せらる〇時宗の二遍上人寂

庚子三〇 三月廿日世尊後乃御子とさる御中

より二つは御せらる〇同九月の御深系八日世

尊なること自宮〇九月龜山院修とさる

辛卯四〇 二月さるおらりあつてさる

○四月長ちさる乃上とさるの事あり

○おらるの乃阿の寶の事あり

○四月十七日八段乃塔なる
登色家仁元〇四月さるく大らんとされぬ
人お二万金〇八月さるかあり
甲午二〇 正月格別をさる寺乃の事あり

乙未三〇 四月廿日あられあつ

丙申四〇 十月廿日見孫とさる御世じりあられあつ

丁酉五〇 花堂の事あり

寺乃の事あり

戊戌六〇 由良乃の事あり

○八月の事あり

己亥 後伏見院 壬午位十二年

正應 寧一山の事あり

庚子 二月廿日曾本願寺第二代知信上人遷化

